法然仏教学研究センター　2023 年度全体研究会

〈第 1 回〉

日　時：2023 年 4 月 28 日（金）

参加者：14 名

・センター長あいさつ

・各班進捗状況発表

〈第 2 回〉

日　時：2023 年 5 月 26 日（金）

参加者：16 名

・研究発表

発表者：一ノ瀬和夫（当センター学術研究員）

テーマ：『往生要集』と法然浄土思想

要　旨：法然の『往生要集』釈書は、四種存在する。それをめぐって、多くの研究が積み重ねられてきているが、その歴史には一つの分岐点がある。1990 年代に林田康順氏によって提起された、『要集』助念門の「惣結要行部」釈は後の時代の増補であるという説である。こうして、それ以後の研究は、この説を前提とするところから始まることになるが、それが定説として全面的に受け入れられているのかというと、そうとも言えない。そこで、林田説登場以前の代表的研究、及びそれ以後の研究を概観し、問題点を整理した上で、『往生要集詮要』、『往生要集釈』に絞って、その論理構造を分析し、二種類ある惣結要行部釈（林田氏命名の「A 釈」、「B 釈」）の意味と働きを検討した。結論として、林田氏の指摘通り、惣結要行「B」釈は後世に追加されたものであることは確実で、法然の『要集』解釈を最も正確に反映していると思われるのは、「B 釈」を含まない『往生要集詮要』であり、後世の増補は、菩提心批判への対応であった可能性もあることを示唆した。

・各班進捗状況発表

〈第 3 回〉

日　時：2023 年 6 月 23 日（金）
参加者：20 名
・研究発表
発表者：伊藤晃希（当センター学術研究員）
テーマ：霊空『旁観記』に見る法然観とその変化
要　旨：『一枚起請文』の註釈書を通して「一大念仏論争」の起源についての考察を発表した。「一大念仏論争」とは近世に天台宗の霊空が浄土宗の念仏を批判したことによって起こった論争である。この論争の起源は従来、「元禄の安楽騒動」という天台宗内でなされた論争であるとされてきた。しかし先行研究から「一大念仏論争」での霊空の主張にはこれまでの霊空には見られなかった「法然批判」がなされていることが分かった。したがって天台宗同士の論争である「元禄の安楽騒動」が起源では、「法然批判」がなされ始めたことの説明がつかない。よって本稿では「元禄の安楽騒動」と「一大念仏論争」の間に起こった霊空と浄土宗の論争である「一枚起請文論争」に着目し「一大念仏論争」の起源を考察した。
・各班進捗状況発表

〈第 4 回〉
日　時：2023 年 9 月 29 日（金）
参加者：18 名
・研究発表
発表者：齊藤隆信（当センター嘱託研究員・知恩院浄土宗学研究所嘱託研究員）
テーマ：斉朝上統は法上法師なのか？
要　旨：道綽禅師（562-645）の『安楽集』巻下第四大門の冒頭には、インド・中国の浄土教における師承である六大徳が紹介されている。すなわち、インドの①菩提流支、中国の②恵寵、③道場、④曇鸞、⑤大海、⑥斉朝上統であるが、最後の斉朝上統だけはなぜか王朝名と僧官名で示されている。そして、これに該当する人物を法上法師（495-580）に特定したのが法然だった（『逆修説法』『選択集』）。法然は斉朝上統を法上法師に特定した根拠を示しておらず、それ以後もこの法上説に対する疑義が生じることもなく、現在に至るまで踏襲されてきた。しかし、諸資料を種々検討した結果、本発表では新たに曇延説を提起した。曇延（516-588）は法上とは異なり、さまざまな顔を持つ解義僧だった。涅槃宗の学匠と

して涅槃教学を牽引し、北周の廃仏からの復興に尽力した護法僧であり、さらに浄土教信仰を持っていた。

中巻第八・十・十三話を具体例として、これらの話はどのような資料に基づき、どのように作られたのかについて考察した。特に日中文化交流の視座から、『心性罪福因縁集』における五代から北宋にかけての仏書や信仰の受容の一端を浮かび上がらせた。

・各班進捗状況発表

〈第 5 回〉

日　時：2023 年 11 月 24 日（金）

参加者：15 名

・各班進捗状況発表

〈第 6 回〉

日　時：2024 年 2 月 29 日（木）

参加者：12 名

・研究発表

発表者：大久保慶子（当センター嘱託研究員）

テーマ：鬼神往生譚に関する一考察

要　旨：浄土宗の開祖である法然上人は、身分や性別に関係なく、「専修念仏」の教えを説いたことが周知されている。その一方で、法然上人が「鬼神」にも念仏の教えを説いたという話が『法然上人伝（十巻伝）』『正源明義鈔』『法然上人秘伝遠流記』などに記されており、文献ごとに多少の差違はあるが、法然上人の鬼神説法と、鬼神たちの往生が記されている話を「鬼神往生譚」と称する。従来の研究では、「鬼神往生譚」における法然上人の説法について、ほとんど論じられることはなかった。本発表では、「鬼神往生譚」における法然上人の説法に着目して内容を検討した結果、「鬼神往生譚」は法然上人の教説を受容しながら、称名念仏の教えによって、死苦に悩む鬼神たちを済度しようとする法然上人の姿が記されているのであり、法然上人の事績の一つとして作り出された話が、宗派や時代を超えて、幅広く流布していたことが推察される。

・各班進捗状況発表

以上